

03
つくる

忍耐強く、実直な山形人の気質と
最上川流域の気象条件。
最上紅花の歴史は、ここから始まった。


 紅花栽培の流れ


県内で紅花が栽培されるようになったのは室町時代末期（1550～1570年頃）と言われています。

「最上紅花」は露地栽培の場合、3～4月に種を播いて7月に収穫します。稲作農家にとって紅花栽培は、田んぼの作業と重ならないため、うまく組み合わせて栽培できるというメリットがあります。

栽培に適している条件は、雨が少なく、中性または弱アルカリ性の肥沃な土地。生育温度は10～25℃で、生育が進むほど高温で日照時間が長いほうが良いとされています。最上川流域はこうした環境条件を満たしていることから、紅花栽培が長く根付いてきたのです。

また、古くから落ち葉や萱^{かや}、堆肥などの有機質資材を用いた「環境に優しい」栽培が行われています。




紅花の摘み取りは早朝に

莖やガクにはトゲがあるため、紅花の摘み取りは、トゲがやわらかくなる朝霧のかかる早朝に行われます。一方の手で総苞を押さえ、もう一方の手で花びらだけを摘み取ります。


紅花栽培の流れ



01

 畑をつくる

日当たりと水はけの良い圃場を選びます。雪解け後の3月中旬から4月中旬に堆肥や石灰、窒素、リン酸、カルを多く含んだ肥料等を散布し、よく耕します。

 種を選ぶ

02

3月中頃に、良質の種を選別する作業を行います。用意する種は1㎡あたり75粒程。種を選び、よく水洗いをして流水に12～24時間浸け、しっかり吸水させてから播種します。



03


 種を播く

時期が遅れると草丈が低いうちに開花してしまうため、播種の適期は4月上旬～中旬。一つのうねに約20cm間隔で2列に播き、1～2cm程度の覆土をします。発芽までの目安は7～10日です。


紅花栽培の流れ



04

 間引きをする(1回目)

本葉が2～3枚開いた頃に1回目の間引きをします(5月上旬頃)。株間が2～3cmの間隔になるように、大きく、葉が色よく育っているものはそのままに、葉が褐変しているものや生育不足のものを抜きます。

 間引きをする(2回目)

05

葉数が6～7枚になったら株間が10cm程度になるように再度間引きをします。今度は、2条のバランスを見て、互いちがいになるように抜いていきます。間引いた株の茎と葉は、若菜として食べられます。



06

 病気や虫から守る

紅花は、病気や害虫がつきにくい植物ですが、梅雨前の5月中旬～6月中旬に炭そ病やさび病などの病気、アブラムシやハモグリバエなどの害虫が発生します。病気や害虫の被害を受けた茎葉は除去します。

紅花栽培の流れ


07

 土寄せをする

根を大きく張らせるために草丈が30cmぐらいに成長したら、根を傷めないように土寄せを行います。60cm程度に伸びたら最後の土寄せをして、株の倒伏を防止します。まめに除草することも大切です。




08

 支柱を立てる

土寄せが終わったら、うねの両側に1~2m間隔で支柱を立て、太めのビニールひもなどを張って倒伏防止を。フラワーネットを使用する方法もあります。こうして7月上旬の収穫を待ちます。



09

 収穫（花摘み）

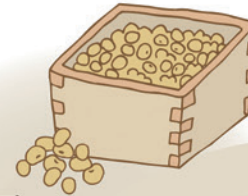
紅餅・すり花用は、花びらの下部が黄色から少し赤い色に変わった頃が収穫の適期です*1。乱花用は、花びらが黄色のうちに収穫します*2。

*1：朝霧のあるうちに摘み取ります。
*2：晴れた日の日中花びらが乾いた状態で摘み取ります。



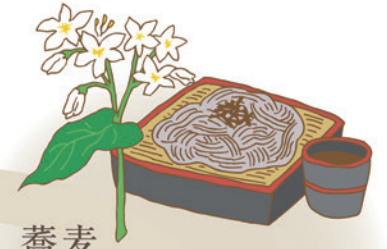
輪作体系

同じ作物を同じ畑に連続して栽培することを「連作」と言います。作物によっては連作をするとだんだん生育が悪くなる現象（連作障害）が起こります。紅花も連作を嫌うキク科の作物です。紅花栽培では、連作障害を防ぐため、隔年や数年ごとに他の農作物と交互に作付けする「輪作」に取り組んでいます。



大豆

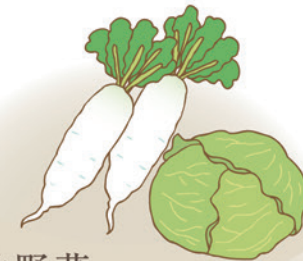
大豆も連作に向かない作物です。収量、品質の低下を防ぐために紅花との輪作が積極的に行われています。



蕎麦

輪作作物の代表格。中山町の柏倉九左衛門家に残る古文書には1824年（文政7年）から1876年（明治9年）まで約50年間の輪作の様子が記されています。

代表的な輪作品目



秋野菜

紅花収穫が終わる7月以降に、キャベツや大根、山形青菜など葉物の秋野菜が栽培されます。

紅花の染色用加工 (紅餅・すり花・乱花)



花びらが少し赤みをさしてくる「三片紅」の状態になったら、紅花の摘み取りが始まり、「紅餅」「すり花」「乱花」に加工されます。

なぜ「紅餅」「すり花」「乱花」に加工するのか

江戸時代には、摘み取った紅花は、着物の染料や化粧品として使用されるため、船で京都や大阪に運ばれていましたが、花びらの鮮度が大きな課題でした。そこで、効率性、輸送性、保存性に大変優れ、発酵させることによって、より鮮やかな紅が得られる「紅餅」に加工する方法が開発されました。現在では、染料だけでなく、加工食品にも利用されるようになり、用途によって、「紅餅」「すり花」「乱花」に加工されています。

紅花の染色用加工

紅餅をつくる

発酵させることで赤の色素を高めて紅餅に加工する、古来から行われていた伝統的な方法です。



01

荒振り

摘み取った紅花をきれいな水で洗い、ゴミなどを取り除きます。

02

中振り

花びらをよく揉んで黄色の色素液を出し(集めた黄汁は、黄染めや着色料に使用できます)、よく水洗いをします。



03

花寝せ

ざるの上に花びらを広げて少量の水をかけたなら、むしろで覆って風通しの良い日陰に置きます。乾かないように1日2~3回黄色い部分がなくなるように、かき混ぜながら水をかけ、深紅になるまで2~3日寝かせます。




紅花の染色用加工

紅餅をつくる



04

 搗き (つき)

花寝せした紅花は、臼や餅搗き機などについて、酸化を促進し、成形しやすいように花びらを潰します。

05

 成形

搗いた花びらを3cm程の大きさに丸めます。むしろ等に並べて手でつぶして煎餅のように成形します。



06

 乾燥

直射日光の当たる風通しの良い場所で乾燥させます。天日で干して裏返すことを繰り返し、乾燥させます。完成した紅餅は紙袋に入れて、風通しの良い乾燥した場所(涼しい冷暗所)に保管します。



紅花の染色用加工

すり花をつくる

白やすり鉢で擦ることで、花びらの表皮組織を壊して急激に酸化させる紅餅加工を簡略化した方法です。一例を紹介します。



01

葉やゴミなどを取り除いた紅花を、湿らせて蒸らした状態で4~8時間放置しておきます。

02

寝かせた花びらに、少量の水を加えて混ぜ、専用のねり機にかけて粗く潰します。これを3回繰り返したら布袋に入れて、黄汁を絞り取ります。



03

少量の水を加えてもう一度ねり機にかけたあと布袋に入れて脱水し、完全に水分を抜きます。



04

4~5枚敷いた新聞紙に薄く広げて、風通しの良いところで乾燥させます。



紅花の染色用加工

乱花をつくる

摘んだ花びらをそのまま乾燥させた干紅花。
現在では、加工食品に彩りとしても利用されます。



01

晴れた日の朝に黄色の花びらのものを摘み取ります。花びらが濡れている状態の時は行いません。

02

摘み取った花びらをごぎ等に広げ、葉やゴミを取り除きます。



03

葉やゴミを除いた花びらは箱などに広げ、風通しが良く、直射日光のあたる場所で1日で乾燥させます。



紅餅1個は紅花何輪分?

紅餅1個を作るために必要な紅花は300輪。生花2kgあたり、紅餅は200gしか作れません。それほど紅餅は貴重なものです。

紅花の染色用加工

使われ方紹介

「紅餅」への加工は今で言うところの6次産業化の先駆け。
染料や加工食品など用途にあわせて「すり花」「乱花」が使用されます。



紅餅

山形県を代表する「米沢織」をはじめとする絹織物の染料として使用され、織物業振興の一端を担っています。

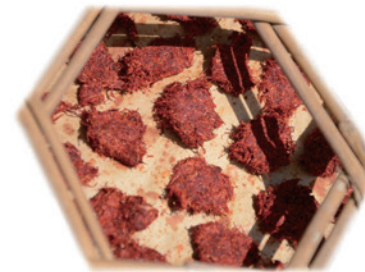


江戸時代は紅餅を材料に化粧用の紅がつくられ、口元や目元、頬などにつけておしゃれを楽しんでいました。

飲料やお菓子、アイスクリームなどに乱花を使用した加工食品が次々と開発されています。



乱花



すり花



健康ブームや在来作物への関心が高まり、レストランなどで提供する料理にも使用されています。

優しい色合いの紅花染の製品は、現代の趣向に合わせ、気軽に紅花染を楽しむことができる。



切り花の利用



さくらんぼの赤色から紅花の黄色へと、彩りを変えていく山形の初夏。山形を象徴する花として、観光客や地元の人たちにも気軽に楽しんでもらえるよう品種改良も進んでいます。フラワーアレンジメントや花束に使いやすいように、平成21年に山形県農業総合研究センター園芸試験場では小振りな花数の多い切り花向けの剣葉種「夏祭」を発表。家庭でも紅花を楽しむことができるようになりました。切り花として飾る場合は、3~4輪開花したものを使います。ドライフラワーにする場合は、しっかりと開花したものを日陰の風通しのよい場所に吊り下げておきます。どちらも、小さな花火のように可愛い花が見る人を魅了してくれることでしょう。

切り花の利用

新品種紹介



夏祭(なつまつり)

鋭いトゲのある「もがみべにばな」から突然変異育種法により作出したもの。他品種よりも草丈が低く、花は小ぶり。ツボミ数は25個前後と多く、咲き始めは黄色で、その後、紅色に変化します。

※突然変異育種法とは、薬剤処理などで人為的に遺伝的変異を生じさせて品種改良する方法。

〈「夏祭」を使ったフラワーアレンジメント〉

